

## 研究報告

# 病気の家族員を持つ家族の役割移行における役割遂行

## Role Performance in Role Transition of the Family with a Illness Member

安部 志穂 (Shiho Abe)\*  
井崎 亜紀 (Aki Izaki)\*\*  
日野 泉 (Izumi Hino)\*\*\*\*\*

森本 弥生 (Yayoi Morimoto)\*\*  
田上 知江美 (Chiemi Tagami)\*\*\*\*  
瓜生 浩子 (Hiroko Uryu)\*\*\*\*\*

### 要 約

家族の一員が病気のためにそれまで担ってきた役割を遂行できなくなった時、家族がそれらの役割をどのように取得し、遂行しているかを明らかにすることを目的とした。病者が担っていた役割を他の家族員が引き継ぎ、既にその状態が定着している家族の主に役割移行に関わった家族員6名を対象に半構成的面接調査を行い、質的帰納的に分析した。

その結果、主遂行者の役割遂行として【引き受けた役割を中心に生活構築する】【引き受けた役割と家族生活とのバランスを取る】【要領をつかむため自分なりに試みる】【思考や方法を柔軟に変える】【問題解決のための手立てを講ずる】【家族が一丸となって取り組む】【周囲の力を駆使する】の7つが、他の家族員の役割遂行として【主遂行者の心身を労わる】【状況に応じてできる範囲で手伝う】【自分から意欲的に手伝う】【最も条件の合う家族員にすべて任せる】の4つが抽出された。家族は役割移行を促進するために、家族内での協力体制の構築や、移行した役割と生活とのバランスの調整を図っていた。また、主遂行者が役割を自分のものにするための取り組みや、役割移行によって生じる問題への家族としての取り組みが見出された。

キーワード：家族、役割移行、役割遂行

### I. はじめに

家族の一員が病気になると、家族役割の一部が停滞し家族機能が不安定となるため、家族全体の役割を見直し調整することが求められる。家族は家族員の病気という戸惑いの中で、生活を維持するために即座に役割移行をしなければならず、病者が担っていた役割を新たに引き受けることになった家族員は、それまで自らが担ってきた役割と両立させるだけでなく、新たな知識や技術を身につけ実践していかなければならないため、身体的、精神的な負担が大きいと考えられる。また近年、家族の縮小化や核家族化が進む中で一人の家族員に課せられる役割は多く、健康障害によりそれらが遂行できなくなったことで生じる家族への影響は大きい。さらに、役割を委譲できる家族員も限られているため、複数の役割を同時に受け入れなければならない

こともあり、その場合、その家族員はそれぞれの役割を十分に果たせない状況となる可能性がある。したがって、家族の役割移行が円滑に進むような援助が必要である。

役割移行が必要な状況において、病者の役割を主に担うことになった家族員（以下、主遂行者とする）は、家族機能の安定を図るために、1日も早く役割を取得しようと独自の工夫を行っている。また、家族は本来互いに助け合うことで家族としての安定を保とうとする性質をもっている<sup>1)</sup>ため、主遂行者だけでなく他の家族員も協力し、家族全体で困難な状況を乗り越えようとしていると考えられる。しかし、役割移行に関する先行研究には、一人の家族員に焦点を当てたものはある<sup>2)~3)</sup>が、家族全体の視点から役割移行を捉えている研究は極めて少ない。そのため、主遂行者が役割を取得するために行っている方略だけでなく、家族員間の相互作用を

\*東海大学医学部付属病院      \*\*高知医療センター      \*\*\*倉敷中央病院      \*\*\*\*高知県立大学大学院看護学研究科  
\*\*\*\*\*愛媛大学医学部付属病院      \*\*\*\*\*高知県立大学看護学部

含めた家族全体の役割移行を明らかにすることは重要である。

役割理論では、新たに役割を担うことになった人は、自分の置かれている状況に気付き、社会規範や価値観に基づいて自分に求められている役割を認知し、その役割認知に沿って、周囲の役割期待の影響を受けながら、役割の方向性を具体的に定める役割規定を行い、役割を実際に遂行する。その役割遂行に対し他者からプラスの評価を受けた場合、役割は結晶化するとされる。本研究では、家族の役割移行における「役割遂行」に焦点を当てることにした。

## II. 研究目的

家族の一員が病気のためにそれまで担ってきた役割を遂行できなくなった時、家族がそれらの役割をどのように取得し、遂行しているかを明らかにすることを目的とする。

## III. 用語の定義

家族の役割移行：役割が他の家族員に移り行くことであり、家族がその状況に気づくことから始まり、役割認知・規定、役割遂行を経て、役割の結晶化に至るまでの家族内の役割の調整をはかる一連のプロセス。

役割遂行：役割認知・規定を基に、家族が役割の調整や修正をしながら、求められる役割にふさわしい行動をとること。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン：

既存の研究では、家族の役割移行については十分に明らかにされておらず、また、役割移行はプロセスであり、家族内で相互作用し合う中で行われる動的なものである。したがって、研究デザインは、質的帰納的研究方法を用いることとした。

### 2. 研究対象：

家族の役割移行によって生じる家族内の相互作用が見えるように、3人以上の家族構成で複

数の家族員が同居しており、病者が担っていた役割を他の家族員が引き継ぎ、既にその状態が定着している家族で、役割移行の状況に詳しい家族員を対象とした。

### 3. データ収集方法：

研究の枠組みに基づいて半構成的インタビューガイドを作成し、6回のプレテストを実施して洗練化した。同意の得られた研究協力者に、1時間～1時間半の面接を行った。対象者には、家族内にどのような状況が発生し、病者の役割を家族がどのように引き受け、遂行していったかを語ってもらった。

### 4. データ収集期間：

平成22年8月中旬～9月中旬

### 5. データ分析方法：

家族員は各々の立場から各々のやり方で役割移行に取り組んでおり、主遂行者とそれを取り巻く他の家族員の両方の視点から役割への取り組みを捉えることで、両者の相互作用を含む家族としての取り組みを捉えることができると考えた。そこで、家族内の相互作用を意識しながら、主遂行者の役割遂行と他の家族員の役割遂行を抽出していった。インタビュー内容から逐語録を作成し、家族の役割移行の過程において役割に取り組むために家族員がとった行動を抽出し、主遂行者とその他の家族員がとった行動の2つに分けコード化した。そして、類似した意味をもつコードをまとめ、カテゴリー化した。分析にあたっては、信頼性・妥当性を高めるために、質的研究あるいは家族看護学の研究の経験を持つ研究者から継続的な指導を受けた。

### 6. 倫理的配慮：

本研究は、研究者が所属する施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者に対しては、研究の目的・方法、研究参加の任意性の保証、研究協力の撤回の自由、公表の可能性とプライバシー保護の保証等について、書面と口頭で説明し、同意を得た。個人情報やデータは鍵のかかる場所で厳重に保管し、研究終了後に破棄した。

## V. 結 果

### 1. 対象家族の属性

対象家族はA県内に住む、家族員が慢性疾患を抱え役割移行が必要となった6家族で、インタビューは、4家族は病者の配偶者に、2家族は子どもに行った。主遂行者と病者との続柄は、2家族が配偶者、3家族が子ども、1家族が配偶者と子どもであった。主遂行者の年齢は30歳代～80歳代で、平均58.2歳であり、仕事を持っている主遂行者は5人であった。病者の年齢は60歳代～80歳代で、平均73.5歳であった(表1)。

### 2. 病気の家族員を持つ家族の役割移行における主遂行者の役割遂行

分析の結果、病気の家族員を持つ家族の役割移行における主遂行者の役割遂行には、7つの大カテゴリー、22の中カテゴリー、57の小カテゴリーが抽出された(表2)。以下、大カテゴリーを【 】, 中カテゴリーを〈 〉で表記する。

#### 1) 【引き受けた役割を中心にして生活を構築する】

【引き受けた役割を中心にして生活を構築する】とは、役割を第一に考え、役割に生活を合わせていくことによって、自分が役割を行いやすい状態を作ることである。例えば、〈役割を行える環境を自ら作り出す〉では、「たまたま長男だけが結婚してなかったから…(中略)…

〇〇に勤めてたんですね。こっちでもできるからということで、一緒に帰ってきてくれたんです(ケース②)」というように、自分が役割を行いやすい環境を考え、それに基づき自身の今の生活を自ら変化させていた。〈自分の生活よりも役割を優先する〉では、「ある程度もう泊まりで行く出張とかは断ったりだとか(ケース⑥)」というように、新たな役割を担うことを重要視し、自分の生活よりも新たな役割を優先してその他の役割を調整していた。

#### 2) 【引き受けた役割と家族生活とのバランスを取る】

【引き受けた役割と家族生活とのバランスを取る】とは、役割だけではなく自分の生活や他の家族員の生活も大切にしながら、生活に無理が生じないようにできる範囲のことは行うことである。例えば、〈自分の生活に支障をきたさないように行う〉では、「私もねえ、だいたい夜の8時か、お嫁さんが仕事から帰ってくるまで。…(中略)…帰ったら主人のご飯作らないかんからねえ(ケース⑤)」というように、役割を行う時間を区切ったり、気持ちを切り替えることによって、自分の生活への影響を小さくしていた。〈他の家族員に配慮し負担をかけないように行う〉では、「もう仕事をしている者には負担をかけない。自分がやる(ケース⑥)」というように、役割を頼むことで生じる他の家族員の負担を考え、他の家族員の生活に無理が生じないように配慮しながら役割を遂行していた。

表1 対象家族の属性

家族	病者		移行した役割	主遂行者			役割移行年数	家族構成 (病者以外の家族員)
	病者	年齢・性別		病者との続柄	年齢	仕事		
①	Aさん	70歳代・男性	スポーツのコーチ	息子	40歳代	有	3年	妻・息子夫婦・孫2人
②	Bさん	60歳代・男性	介護	息子	30歳代	有	4年	母・息子
	Bさんの妻	60歳代・女性	家事・介護					
③	Cさん	70歳代・男性	農作業	妻	60歳代	無	18年	母・妻・息子夫婦・孫2人
④	Dさん	70歳代・男性	農作業	妻	70歳代	有	3年	
⑤	Eさん	80歳代・女性	家事・介護	娘	60歳代	有	8年	妻・息子夫婦・孫2人
⑥	Fさん	70歳代・女性	家事・介護	夫	80歳代	無	12年	娘夫婦
				娘	40歳代	有	2年	夫・娘

表2 病気の家族員を持つ家族の役割移行における主遂行者の役割遂行

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	
引き受けた役割を中心にして生活を構築する	役割を行える環境を自ら作り出す	未婚である自分が仕事を辞めて故郷に戻る	
		長男である自分が親と暮らしてやっていく	
	自分の生活よりも役割を優先する	優先順位を決め自分の生活を組み込む	
		役割以外のことは後回しにする	
		他の仕事の時間を調整して行う	
引き受けた役割と家族生活とのバランスを取る	自分の生活に支障をきたさないように行う	時間の区切りをつけて行う	
		仕事中は頭を切り替えて行う	
	自分でできる範囲のことをやる	自分ができる範囲のことを自分なりにやる	
		自分にしかできないことだけを引き受ける	
		病者ができなくなった部分だけを補う	
	他の家族員に配慮し負担をかけないように行う	家族の負担を増やすことは頼まない	
		仕事をしている家族員にはやってもらわない	
		定年退職して仕事をしていない人が主に行う	
	要領をつかむため自分なりに試みる	やっていた人の模倣をする	普段から見ていたことを生かして体験してみる
			見よう見真似で行う
自分なりに工夫してやり方を覚える		やり方の理屈を覚える	
		やり方を頭の中に入れる	
		メモをして覚えていく	
		やり方のパターンをつかむ	
よりよい方法を模索する		行った結果を確認しながらやっていく	
		好きなやり方ではなく適した方法でやる	
苦手でも実際に経験していく		嫌だけど経験を踏む	
		下手でも体験しながら体で覚えていく	
		繰り返し方法を教えてもらう	
病者から適切な方法を習う		病者に確認してもらう	
	病者に教えてもらいながらやる		
思考や方法を柔軟に変える	考え方を転換しながら行う	前向きに考えながらやっていく	
		いい方向に解釈を切り替える	
問題解決のための手立てを講ずる	困ることがないように日頃から備えておく	時間がある時に少しずつでも欠かさずにやる	
		失敗しても損失が出ないように備える	
		他の家族員でも代替がきくように方法を共有する	
	誰かに相談して問題を解決する	疑問があれば誰かに相談する	
		困難が生じた時詳しい人に相談する	
家族が一丸となって取り組む	家族で役割を分担して行う	それぞれすることを区別する	
		一人でやっていた役割を複数の家族員で行う	
		みんなに少しずつ手伝ってもらう	
	家族の誰かができるように調整する	みんなでお互いの予定を伝え合い把握する	
		誰ができるかを確認してできる人が行う	
	他の家族員に手助けを求める	自分にはできないことを他の家族員に頼む	
		手に負えない時は他の家族員に手伝ってもらう	
		緊急時には他の家族員と連絡を取る	



表2 病気の家族員を持つ家族の役割移行における主遂行者の役割遂行 (つづき)

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
家族が一丸となって取り組む	家族の力を集める	みんなでできる曜日を設定する
		他の家族員も一緒にできるように役割を作る
		家族員のやる気を起こす
		病者の自尊心に配慮して役割を残す
		他の家族員と相談しながら話を進める
	仕事として他の家族員に手伝ってもらう	
	次世代に繋いでいくことを形に残す	次の世代に継ぐために必要なことを記録に残す
周囲の力を駆使する	周囲に一部を手伝ってもらう	専門家の助けを得ながら行う
		お金を払って外部資源に切り替える
		できないことは一緒に行ってきた人に任せる
		周囲の人の援助を受けて行う
	周囲に間接的に支えてもらいながら行う	周囲からの後押しを励みにしてやっていく
		職場の理解を得て就業時間を調整してもらう
周囲の協力を得やすい方法をとる	職場への影響が少ない方法で休みを取る	

## 3) 【要領をつかむため自分なりに試みる】

【要領をつかむため自分なりに試みる】とは、新たに引き受けた役割を1日も早く習得するために、他者から方法を教わったり実際に体験してみる等、試行錯誤することである。例えば、〈苦手でも実際に経験していく〉では、「やってみたら一番ようわかるんでやって、下手でもしてみようと、物に慣れなくってもやってみようと(ケース④)」というように、苦手なことでも、頭で考えるよりまず経験して、自分の感覚を通して身につけていた。〈やっていた人の模倣をする〉では、「私も普段はずっと主人のそれこそ手伝ったり、見ていたりとか、することはずっと見てますのでねえ…(中略)…いろいろ体験を自分がやってみる(ケース④)」というように、その役割を担っていた人が普段行っていた方法を思い出し、それを基にとにかく真似ることで役割を習得しようとしていた。〈よりよい方法を模索する〉では、「ヘルパーさんが帰った後で、私が作ったのをね、食べ残しを置いておいて下さい言うて置いてもらったの。どれくらいの量食べてるか。そしたらね、嫌いな物はさすがに残るとる(ケース⑤)」というように、単に役割を果たすだけでなく、結果を振り返って方法を改善したり、適切だと考える方法を用いることで、最適な方法を見出していた。

## 4) 【思考や方法を柔軟に変える】

【思考や方法を柔軟に変える】とは、役割を遂行する上で困難な状況を乗り越えていくために、今の考えに固執せず、思考を前向きに切り替えたり、方法を改善する等、役割に関する考えや方法を柔軟に変化させることである。例えば、〈考え方を転換しながら行う〉では、「前向き前向きに、あんまりあの時ああやったこうやったらって思わへんようにせな一と思うてね(ケース③)」というように、今ある状況を乗り越えようと、前向きに考えたり、気持ちが楽になるように考え方を切り替えていた。〈方法を建設的に変えながら行う〉では、「初めは私も半日だけ休んで、…(中略)…それじゃああれかなってことで、もう1日休むようにして(ケース⑥)」というように、役割を今の方法よりも、さらに行いやすくするために、方法を柔軟に変えながら行っていた。

## 5) 【問題解決のための手立てを講ずる】

【問題解決のための手立てを講ずる】とは、失敗や困難が生じた時に、新たに役割を引き受けた自分でも対応することができるよう、日頃から問題に備えたり、他者の助言を基に問題を解決するための効果的な方法を考え行うことである。例えば、〈困ることがないように日頃から備えておく〉では、「失敗があってもここが

助かるとかいうことで、ちょっと多めに作ってみるとか（ケース④）」というように、役割に取り組む上で、予測される困難にうまく対処できるように、日頃から前もって準備していた。〈誰かに相談して問題を解決する〉では、「いろんな問題が起こった時に、これはどういう風に解決していったらいいんだろうっていうことを助言下さる方がほんとにいて、…（中略）…そのケアマネの方であったりとか（ケース⑥）」というように、役割に取り組む中で、疑問や困難が生じた時に、その役割に詳しい人から対処するための知識を得て問題解決に努めていた。

#### 6) 【家族が一丸となって取り組む】

【家族が一丸となって取り組む】とは、家族の結びつきを意識して、家族で役割を行っていくと役割を共有し、家族員一人ひとりの力を生かして家族内で協力し合い、役割に取り組むことである。例えば、〈家族で役割を分担して行う〉では、「この池の水、池で鯉を飼ってまずけど、よう鯉の水なんかもできないんで、私が洗って消毒して。…（中略）…で、息子と嫁さんとみんなが協力しながら（ケース④）」というように、役割を一人で抱え込まず、他の家族員も含め、それぞれに役割を分担し、他の家族員とともに行っていた。〈家族の誰かができるように調整する〉では、「息子は息子、嫁さんは嫁さんでそれぞれ仕事がありますけんね。…（中略）…お嫁さんが今日は私が山行ってくるわ、拾ってくるわ、拾ってくるよという風の下さるんで。やっぱり家庭での話し合い、皆の輪っていうかね（ケース④）」というように、日々役割に取り組む中で、家族員の誰ができるかを把握したり、役割自体を誰が引き受けることができるかを家族内で話すことで、必ず家族員の誰かが役割を担えるように調整を図っていた。〈家族みんなの力を集める〉では、「みんながそれこそ日曜日、どうしても日曜日っていうて決めちゃう。その時にみんながもみまきに出て（ケース③）」というように、役割に対する家族の関心を引き寄せ、みんなが役割を意識して取り組めるように、家族の力を合わせて行える体制をつくっていた。

#### 7) 【周囲の力を駆使する】

【周囲の力を駆使する】とは、家族以外の人に役割の一部を代行してもらったり、役割を手伝う以外の形で援助を受けたりと、周囲の力を上手く活用することである。ここでいう周囲とは家族員以外の人や社会資源をさす。例えば、〈周囲に一部を手伝ってもらう〉では、「私が早めに来て、（病者の）お昼御飯を作って、これをお願いしますということでヘルパーさんにお頼みして（ケース⑤）」というように、役割の質を維持しながらも、自分の負担を軽減するために、役割を代行してもらったり一緒に担ってもらったりと、周囲の力を借りて行っていた。〈周囲に間接的に支えてもらいながら行う〉では、「休みとかがある程度フレキシブルにとれるだとか、そういう環境を作って下さる周りに助けられてっていうところですね（ケース⑥）」というように、周囲に役割を直接担ってもらのではなく、周囲からの後押しや理解等の支えを励みにし、自分がやりやすい環境を維持しながら、役割を主体的に行っていた。

### 3. 病気の家族員を持つ家族の役割移行における他の家族員の役割遂行

分析の結果、病気の家族員を持つ家族の役割移行における他の家族員の役割遂行としては、4つの大カテゴリー、8の中カテゴリー、17の小カテゴリーが抽出された（表3）。

#### 1) 【主遂行者の心身を労わる】

【主遂行者の心身を労わる】とは、他の家族員が主遂行者の心身を気にかけて、主遂行者一人に負担がかかりすぎないようにねぎらいの言葉をかけたり、役割の一部を手伝うことである。例えば、〈主遂行者の心身を気遣う言葉をかける〉では、「娘に言われることが、おじいさんの世話一生懸命やらないかん、それだけでも大変なんだからあんまり外のことはおばちゃんしないでって、倒れたら困るからって言われるのは、もう娘にも息子にも言われるんです（ケース④）」というように、主遂行者の負担を減らすために、主遂行者へ労わりの言葉をかけていた。〈主遂行者の役割の一部を代行する〉では、「私が帰りが遅くなったりするでしょ。そした

らねえ、洗濯なんかもね、取り込んでくれるんです（ケース⑤）」というように、他の家族員は自分が主遂行者の役割の一部を担うことによって負担を分かち合おうとしていた。

## 2) 【状況に応じできる範囲で手伝う】

【状況に応じできる範囲で手伝う】とは、他の家族員が主遂行者の状況を見極めて、助けが必要だと判断した時には、他の家族員にとって無理のない範囲で手伝うことである。例えば、〈他の役割と調整し手伝う〉では、「私がやったり、それから息子が去年から庭木も摘んでくれたり、いろいろしてます。…（中略）…息子も仕事がありますので、仕事の間に間にねえ（ケース④）」というように、他の家族員は自分の役割を調整することで主遂行者の役割を手伝うための時間を確保し、手伝っていた。〈必要な状況の時には手助けする〉では、「緊急を要する時には、車はないけれども、何かしらの方法で、それはそれで来てくれます（ケース⑥）」というように、普段は手伝わないが、主遂行者一人では手に負えないときだけ手を貸すようにしていた。

## 3) 【自分から意欲的に手伝う】

【自分から意欲的に手伝う】とは、他の家族員が必要に迫られてではなく、自ら進んで主遂行者を手伝うことである。例えば、〈自分から進んで手伝う〉では、「積極的にやってくれますよ。消毒せないかんかったら消毒してくれるしね。（ケース④）」というように、主遂行者から頼まれなくても、自ら積極的に主遂行者を手伝っていた。

## 4) 【最も条件の合う家族員にすべて任せる】

【最も条件の合う家族員にすべて任せる】とは、他の家族員が自分と自分以外の他の家族員には役割を担うことができない事情があるため、条件が整っている主遂行者にすべて任せることである。例えば、〈条件が最も整っている家族員にすべてを任せる〉では、「弟たちはそれぞれもう家庭をもって離れておりますから。だから〇〇家は兄貴頼むーとかいって、どうしても長男に言いますでしょ（ケース②）」というように、役割を行うための能力や時間等の条件が最も揃っている家族員に役割を一任していた。

表3 病気の家族員を持つ家族の役割移行における他の家族員の役割遂行

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
主遂行者の心身の負担を減らす	主遂行者の心身を気遣う言葉をかける	主遂行者にねぎらいの言葉をかける
		主遂行者の身体のことを心配する
		主遂行者に無理しなくていいと言う
	主遂行者の役割の一部を代行する	主遂行者の負担を減らすために役割の一部を代行する
		主遂行者がそれまで担ってきた役割の一部を代行する
		自分の身の回りのことは自分でやる
主遂行者が専念できるように自分がやるべきことをする	主遂行者が専念できるように自分の役目を果たす	
	他の役割と調整し手伝う	忙しい中でも手伝えるように予定を把握する
		仕事をしながらその合間に行う
状況に応じできる範囲で手伝う	自分のできる範囲で手伝う	自分のできることを手伝う
	必要な状況の時には手助けする	緊急の時だけはどうかしてかけつける
		主遂行者の状態を見極めて手伝う
自分から意欲的に手伝う	自分から進んで手伝う	好きで積極的に手伝う
		暇な時に何かにつけて手伝う
		実際にかかわることのできる家族員にお願いする
最も条件の合う家族員にすべて任せる	条件が最も整っている家族員にすべてを任せる	仕事をしていない家族員に全てやらせよう
		役割に詳しい家族員に任せる



## VI. 考 察

### 1. 家族の役割移行を促進するための家族の方略

病気の家族員を抱える家族の役割移行では、家族は困難な状況に対応するために、その家族独自の様々な工夫をしていることがわかった。ここではこれらについて考察する。

#### 1) 家族内での協力体制の構築

主遂行者は役割遂行において、一人で役割を抱え込まず、他の家族員も役割遂行に参加できるような体制や状況を作り、家族が一丸となって役割移行に取り組む方法をとっていた。一方、他の家族員から積極的に主遂行者の心身の負担を減らそうとしたり、状況に応じて自分の可能な範囲で主遂行者を手伝おうとする行動も見られた。このように、家族は役割移行に対して主遂行者単独で取り組むのではなく、家族全体で取り組もうとしていた。家族システムは、内外の変化に対応して安定状態を取り戻そうとするという特徴を持つ<sup>1)</sup>。また、子どもが病気になった時に家族に現れる変化を明らかにした研究<sup>4)</sup>では、父親と祖父母が、患児にいつも付き添っている母親の代わりに家事役割やきょうだいの育児役割をとることで、家族全体で患児が闘病するための体制を形成しようとしていた。このように家族は、家族の生活を維持するために自然と協力をするものであり、変化が生じた時に元の状態に戻そうとする機能を持っていることから、家族は役割移行という突然の状況が生じた時、家族全員でその状況を乗り越えようとする方略をとっていたと考えられる。

#### 2) 移行した役割と生活とのバランス

家族は役割移行が必要になることにより、家族生活を構築し直さなければならなくなる。本研究では数例の家族で、新たに引き受けた役割を第一に考え、その役割を中心にして生活を再構築する行動が見られた。これらは病者が担っていた介護役割が移行した家族でのみ見られた。既存の研究<sup>5)</sup>では、介護は主遂行者一人の努力では遂行が困難であり、家族内で家族役割を分担し直すことによって家族体制を一新する必要があると述べられている。介護役割は家族の生

活に及ぼす影響が大きく、片手間にはできないものであることから、家族は新たに引き受けた介護役割の重要性と一人で担う難しさを認識し協力体制を作るとともにその役割に多くの労力と時間を注ぐことができるように、役割を優先して自らの生活環境を調整していたと考える。これらは、介護役割の移行において特徴的な方略であると考えられる。

一方、新たな役割の遂行に費やす時間に区切りをつけたり、自分のできることを無理のない範囲で行う等、もともとの生活が崩れないようにする行動が見られた。また、他の家族員への負担が最小限になるように配慮し、仕事をしている家族員には任せず、仕事をしていない家族員が主に行うようにしていた。主遂行者は自分だけではなく家族の生活も重視し、他の家族員にできる限り負担をかけないように、家族全体の生活と役割のバランスをとっていると考えられる。また、家族員の仕事の有無は、家族内で誰が役割を担うかを定める上で重要な要素になっていると考える。家族システム理論では、一家族員の安定が揺らいでしまうとそれが家族内に波及し、家族内での安定がはかれなくなってしまうと言われている。家族は、すべての家族員が無理のない生活を送りながら役割を十分に担っていくことができるよう、互いの生活を大切にしながら役割に取り組み、役割と生活を両立させていたと考える。

#### 3) 主遂行者が役割を自分のものにするための取り組み

主遂行者は役割の遂行に必要な知識や技術、行動を1日も早く習得するために、試行錯誤しながらやっており、その方法として、1から自分で方法を編み出すのではなく、それまで役割を担っていた人の方法を参考にする行動があった。Bandura<sup>6)</sup>は、人は新しい行動を実際に起こす以前にモデルとなる他人を観察することによって、それらの行為をどのように遂行すればよいかを学んでおり、それによって人は無用の誤りを犯さずに済んでいると述べている。主遂行者は、あらかじめ他者の行っている方法を見よう見真似で行ったり、元の遂行者の方法を学んだりすることにより、不必要な失敗を回避してい



たと考える。

しかし、主遂行者は病者のやり方をそのまま引き継ぐのではなく、自分なりの方法を考え実践していた。また、自分なりの方法を習得した後もそれに固執せず、状況に応じて考えや方法を柔軟に変化させていた。富永ら<sup>7)</sup>は、人は型どりされた思考や行動の様式を学習した後、それを自己に合わせて行動に表していると述べている。また、認知症介護に関する認識の変容プロセスの研究<sup>8)</sup>では、介護者は認知症介護を行う中で生じる葛藤や生活課題に対して、自分なりの工夫と選択をしながら試行錯誤し、家族の状況に合ったコツをつかんだり、気持ちの落とし所を見出すことにより、介護の体制を築いていた。このことから、主遂行者は他者から学んだ方法をベースにしながら、家族の状況に合うように考え方や方法を変化させることで、役割を無理のない形で継続できるようにしていたと考える。

#### 4) 役割移行によって生じる問題への家族としての取り組み

主遂行者は、様々な工夫をして自分なりの方法を一度習得した後も、予測される困難に対してうまく対処できるように、前もって準備をしていた。これは、家族が困らないようにするため、また、周囲に迷惑をかけず家族だけで問題を解決できるようにするための行動であると考えられる。日本人には、「ウチ」と「ソト」を区別する特有の概念があり、「ウチ」と「ソト」の境界が強固な家族は自力で問題を解決しようとする傾向がある<sup>1)</sup>が、こうした概念が家族の行動に影響し、身内のことは身内で解決しようとしていたと考える。また、家族だけでは対処しきれない困難が生じた際は、必要に応じて周囲からの助言を得ながらも、できる限り家族内で対処しようとしていた。家族員数が限られていたり、役割を行う上で必要な能力が不足している等、どうしても周囲の手助けが必要な状況が生じた場合は、家族外の人に役割の一部を代行してもらおう等、周囲の協力を得ようとする行動も見られた。しかし、その際も家族の側が主導権を握って周囲の力をうまく活用しており、主遂行者がとる方略の多くは、家族員の力を使っ

て行おうとするものであった。このように、役割移行に対し家族は自分たちの力だけで取り組もうとする傾向があることがわかった。

## 2. 看護への示唆

### 1) 家族内のコミュニケーションを活性化する

本研究の対象家族は、家族生活の様々な場面でコミュニケーションを図ることで、互いの状況を把握したり、頼みたいことを伝える等して家族内の協力体制作りがなされており、それによって家族の役割移行が順調に行われていた。現代の家族は個を重んじる価値観が浸透し、家族内の生活スタイルの変化によって家族が共に過ごす時間が減少し、家族のコミュニケーションが希薄になっていると言われている。こうした状況では、役割移行が必要となった時、家族内で話し合いをしたり、相談をする等、家族の協力体制をとることが困難になると考えられる。そのため、家族内のコミュニケーションを促進することで、家族が協力体制をとりながら役割移行に取り組むことができるように支援する必要がある。

### 2) 周囲の力が得られるようにする

家族は、役割を遂行していく上で生じる様々な困難を家族内で解消しようと、自分たちなりの方略で努力していた。しかし、役割を遂行できる家族員の数に限られていたり、時間が不足していたり、知識や技術が不足している等、家族だけの力で役割を遂行するには限界がある場合には、家族は周囲の力を利用して役割移行に取り組んでいた。こうした行動をとるには、家族自身が、役割移行に取り組むためには周囲の力を借りることが必要であるという認識を持つことが必要である。しかし、家族内のことは家族内で解決したいという思いを持っている家族は、社会資源等の周囲の力を借りることをためらい、家族だけで解決しようと極限まで無理をしてしまう可能性がある。家族が自分たちだけでその役割を抱え込むことなく、安定した生活を送っていけるよう、看護師は、その家族の状況を把握し、家族が必要時には周囲の力をうまく活用できるように援助していく必要がある。

## VII. お わ り に

本研究では、病気の家族員を持つ家族の役割移行において、家族がどのように役割を遂行しているかが明らかになった。しかし、家族の役割移行を一連のプロセスとして十分に明確にできたとはいえ、また、それぞれの役割遂行によりどのような効果をもたらされたかまでは明らかにできていない。そのため、今後、家族の役割移行を一連のプロセスとして全体を捉え明確にし、役割移行の過程で生じる様々な状況と役割遂行の関連性を明らかにすることが必要である。

### 〈引用・参考文献〉

- 1) 鈴木和子、渡辺裕子:家族看護学 理論と実践、日本看護協会出版会(第3版)、98、2006.
- 2) 山本美佐子、松島可苗、堀込和代他:母親役割意識と影響要因—産科退院前と月齢1ヶ月時の調査を通して—、北海道医療大学看護福祉学部紀要、11、43-49、2004.
- 3) 小澤治美、森恵美:母親役割の自身につながる双子の母親としての体験—生後4~8か月の双子を養育中の母親を対象にして—、日本母性看護学会誌、17(1)、19-26、2007.
- 4) 水野貴子、中村菜穂、服部淳子:小児がん患児の入院初期段階における母親役割の変化と家族の闘病体制形成プロセス(第1報)、日本小児看護学会誌、11(1)、23-30、2002.
- 5) 北素子:要介護高齢者家族の在宅介護プロセスに影響を及ぼす要因—家族内ニーズの競合を増大させる条件と家族の競合マネジメント—、日本保健医療行動科学会年報、21、126-148、2006.
- 6) A. Bandura: Social Learning Theory、1977、原野広太郎監訳、社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—、10-11、25、142-143、金子書房、1979.
- 7) 富永健一、塩原勉:社会セミナー1 社会学原論、有斐閣、146-179、1975.
- 8) 宮上多加子:家族介護者の認知症介護に関する認識の変容プロセス、高知女子大学紀要 社会福祉学部編、56、1-11、2006.